

## 263 卵巣悪性腫瘍に対する化学療法の個別化と臨床効果

千葉大学

大崎達也, 関谷宗英, 高見澤裕吉

[目的]近年卵巣悪性腫瘍の治療成績は second look手術, cisplatinの導入により改善されつつある。今回更に治療成績の向上を目的として, 新しい試験管内抗癌剤感受性試験の開発により化学療法を個別化し, その臨床効果を比較検討した。  
[方法]昭和46年~59年に治療した卵巣悪性腫瘍161例を対象とした。化学療法は① actinomycin D, FT207, cyclophosphamide併用群, ②cisplatin adriamycin併用群, ③cisplatin, adriamycin (或は, aclacinomycin), cyclophosphamide 併用群, ④個別化群, に分けられ, 小山・斉藤班による有効例には積極的に second look手術を行った。

試験管内抗癌剤感受性試験は, 0.5%以上の材料(手術, 生検, 腹水, 胸水から採取)があれば10種以上の抗癌剤のスクリーニングが100%可能で, 抗癌剤との接触時間は3-8時間, 形態変化を指標とした陽性抗癌剤を24時間以内に判定できた。

[成績]①有効率はAct FTCy群で13%, cisplatin, adriamycin群で20%, CAP群で38%であり, cisplatinの有効性が確認された。②個別化群では58%の予知率で, cisplatin無効例に対しても有効例があった。又個々の卵巣悪性腫瘍に対する陽性抗癌剤が異なることも判明した。③化学療法有効例では, second look手術により更に腫瘍のdebulkingが可能となり, 長期生存例も経験した。

[結論]卵巣悪性腫瘍に対する化学療法の個別化が有効であることを臨床的に確認した。

## 264 卵巣癌維持化学療法の臨床的検討

慈恵医大

田平勝郎, 安田 允, 山本研吾, 小林重光  
古賀良一, 平間義昭, 高橋幸男, 磯西成治  
芳岡三伊, 森本 紀, 寺島芳輝, 蜂屋祥一

[目的]卵巣悪性腫瘍の術後療法は今まだ確立されず, 近年, 本腫瘍の予後改善に対し, 外来で長期間の維持化学療法が行われ始めたが, その効果につき明確に報告したものは少ない。今回卵巣癌の術後療法後, 外来にて長期維持化学療法を行い, 本療法の有効性や問題点につき検討したので報告する。  
[方法]検索対象は昭和50年より当科にて治療した卵巣悪性腫瘍39例(上皮性38例, 胚細胞性1例)である。維持療法は経口制癌剤のTegafur 600~1000mg/day, UFT 200~400mg/day, 5-Fu 200~300mg/dayを中心に2年わたる可及的連続投与を行い症例によりcarboquone 2~6mg/週を追過投与した。上記症例に対し癌治療学会判定基準による効果判定, 投与量, 投与期間, 生存月数, 副作用につき非施行群と対比, 検討した。  
[成績]症例はstage I 16例, stage II以上21例, 転移性2例で, 組織型は漿液性14例, ムチン性6例, 類内膜性9例, 明細胞性6例, その他4例である。投与期間は6ヶ月以内11例(死亡1例), 7~12ヶ月15例(死亡4例)13~24ヶ月6例(死亡1例)25ヶ月以上7例(死亡0例)であった。総投与量は50g以下13例(死亡1例), 51~100g10例(死亡2例), 101g以上11例(死亡3例)であった。投与中止の理由は期間満了15例, 無効再発2例, 死亡6例で, 副作用による中止は認めなかった。副作用は39例中7例(17.9%)で肝機能障害4例, 骨髄障害2例, その他1例を認めた。臨床効果は軽快15例(38.5%), 不変6例(15.4%), 悪化10例(25.6%), 不可8例(20.5%)で, 平均生存期間は早期癌43.2ヶ月, 進行癌23.0ヶ月で非施行群に比し, 有意にその延長を認めた。  
[結論]卵巣癌に対する治療法の確立のため長期の維持化学療法を実施し, 副作用も少なく, その有効性を明確にした。